『一条摂政御集』から説話へ
―歌語り・歌物語から説話へ序説―

堤　和博

はじめに

和泉書院より刊行中の『島津忠夫著作集』が完結間近であるが、その第十巻「物語」（二〇〇六年一〇月）のうち、『大和物語』と『源氏物語』を主として扱った冒頭の二章の校正を手伝った。校正刷りを熟読しながら、島津先生の文学史を見据えた論に改めて教えられるところが多かった。中でも「第一章　歌と歌物語と―『大和物語』を読みつつ―」[1]を読みつつ考えたことを、今回は書き留めておきたい。

島津先生は「歌語り」と「歌物語」を峻別しながら論じておられるが、その区別を私なりに纏めると次のようになる。すなわち、「歌語り」とは、「古歌にまつわる話題や、貴族たちの生活のひとこまに生じた和歌をめぐっての逸話が語り伝えられて」いったもので、「和歌の制作事情だけにかかわるものであり、「歌物語」とは、「「歌語り」が書き留められたもので、「その和歌の作者にまつわる話が付加され」たものである、と。その上で先生は、「歌語り」から「歌物語」へと「ひとつの話が作り上げられてゆく過程」を追い、さらに、同じ話柄を扱った「歌物語」と説話を比較しながら、例えば、「純粋な心の恋物語」であった「歌物語」から「俗な心の争い」が前面に出て説話に変じていくという史的な流れを見通されている。

これまでも歌語り・歌物語を研究テーマとしてきた私の立場からすると、「歌語り」と「歌物語」を先生のように峻別するのは躊躇されるものがあり、本稿では、歌語りと歌物語をことさら峻別せず、歌語り・歌物語から説話へと変じてゆく史的な流れの見通しに導かれながら、自分なりに考えたところを書き留めておきたい。何か明確な結論を得られたというわけでもないのだが、今後も文学史を絡めて諸問題を追究していく端緒としたいのである。本稿の副題に「序説」を付した所以である。

一　1

島津氏（以降、本論部分では、本稿で言及する他の諸氏同様、敬称を氏とさせていただく）が取り上げた例としては最後になるが、『大和物語』第百四十八段と『今昔物語集』巻第三十第五に載る所謂芦刈説話（零落した夫婦の別離と邂逅をめぐる話）の比較検討から考えたことを述べてゆく。

島津氏も引用しているが、両者を詳細に比較した片桐洋一氏[2]が、「『今昔』の場合と違って、『大和』では愛情の物語という形になっているのが大きな特徴である」と指摘する通り、『今昔物語集』の話では主人公の男女の愛情は影を潜めてしまい、貧しく仕事もできない夫と身も心も美しい若い妻とが別離の後、夫は一層落ちぶれ、妻は最終的には摂津守の妻となってから邂逅するという劇的な展開のみが前面に出てきている感がするのに対し、『大和物語』における特に女の愛情の強調は目を引く[3]。第百四十八段は、『大和物語』の中でも説話的な物語を集めたと目される後半の部分に載るのであるが、それでも『今昔物語集』と顕著な違いをみせているは興味深い。

このように、歌物語は、勿論全部ではないが、男女の愛情をテーマとするものが多い（これは歌語りにも当て嵌まると言えよう）のは周知の通りで、それが、同じ話柄を扱いながらも説話になると、男女の愛情とは別の要素が目立ってくるとの見通しが立てられるであろう。

そこで取り上げたいのが、藤原伊尹の私家集『一条摂政御集』の一節と、それと小異を示しながら同じ話を載せる『宇治拾遺物語』上（五一　「一条摂政歌の事」　巻三ノ一九）との比較である。

『一条摂政御集』の冒頭四十一首（以下、「とよかげ」の部と呼ぶ）は、伊尹自作の歌物語的作品であり、伊尹の実体験をもとに創られた卑官の架空人物「とよかげ」なる男と八人の女達との恋物語が八段に分けて描かれている。その二番目に位置する段（以下、Ⅱ段と呼ぶ）は、小野好古女との贈答をもとにして創られているのであるが、その一部と『宇治拾遺物語』の一部が重なっているのである。

まず、Ⅱ段全体からみておく[4]。

みやづかへする人にやありけん。とよかげ「ものいはむ」とて、「しもにこよひはあれ」といひおきてくらすほどに、あめいみじうふりければ、そのことしりたりける人の「うへになめり」といひければ、

とよかげ

をやみせぬなみだのあめにあまぐものゝぼらばいとゞわびしかるべし（3番）

「なさけなし」とやおもひけん。

おなじ女に、いかなるをりにかありけむ。

からころもそでに人めはつゝめどもこぼるゝものはなみ

だなりけり（４番）

女、かへし

つゝむべきそでだにきみはありけるをわれはなみだにながれはてにき（５番）

としをへて上ずめきける人のかういへりけるに、いかばかりあはれとおもひけん。これこそ、女はくちをしうもらうたくもありけれ。

をんなのおやきゝていとかしこういふときゝて、とよかげ、まだしきさまのふみをかきてやる。

ひとしれぬみはいそげどもとしをへてなどこえがたきあふさかのせき（６番）

これをおやに、このことしれる人のみせければ、おもひなほりてかへりごとかゝせけれ。はゝ、女にはらへをさへなむせさせける。

あづまぢにゆきかふ人にあらぬみのいつかはこえんあふさかのせき（７番）

「心やましなにとしもへたまへ」とかゝす。女、かたはらいたかりけんかし。人のおやのあはれなることよ。

Ⅱ段については拙著『歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』[5]で詳論した。そこではⅡ段を３～５番歌の前段と６７番歌の後段に分けながら検討し、結局Ⅱ段全体のテーマは、男の一途さや女の「らうた」さ、はたまた「人のおやのあはれ」さ（７番後書）などを鏤めながら、様々な障害を乗り越えて愛を獲得・維持していくこと

であると読み取ったのだが、後に引用する『宇治拾遺物語』の後半とも大枠共通する後段については、次のように分析した。

６７番の後段は、二人で口裏を合わせて女の親を騙してまで関係を続けようとする話である。話自体の面白み[6]に加えて、『伊勢物語』第六十五段を踏まえた「はらへ」が出てきたり（７番詞書）、「心やましなにとしもへたまへ」（７番後書）と歌以外の所にまで掛詞が出てきたりする面白みもある。しかし後段の面白みは、前段をも併せて読めばこれらだけにはとどまらない。

まず男の側に焦点を当ててみる。とよかげは長年拒まれ続け、雨にまで祟られて逢瀬を逸した女の心をやっと掴んだものの、今度は女の親の邪魔が入る。勿論とよかげは諦めたりしないで、女の親を騙してまで二人の仲を維持しようとする。そんなとよかげの一途さは、前段後段相俟って一層強く感じられる。次に女の側に焦点を当ててみる。前段ではあんなに男を拒んでいたのに、一旦逢ってしまうと、後段では「かたはらいたく思いながら（７番後書）も男の嘘に口裏を合わせて親を騙してしまう。いみじくも５番後書で言及された女の「らうた」さは、前段後段相俟って一層強く感じられるのである。

要するに、Ⅱ段における中心テーマを一言で言えば、男女の愛の獲得と維持であり、『宇治拾遺物語』とも重なる後段には二人の愛に翻弄される女の親の「あはれなる」姿も描かれてはいるが、それも二人の愛情の強靭さを強調する役割を果たすためであると考えられるのである。

ちなみに、Ⅱ段の後半の本文には「おや」・「はゝ」としか書いていないので、父親の役割が明確でない。ここでの「おや」は両親を指していて両親ともに騙されながら、両親のうち特に母親が娘に返事を書かせて「はらへ」をさせたともとれるし、あるいは、ここでの「おや」は「はゝ」を指していて父親は出てこないともとれる。

次に、『宇治拾遺物語』に目を移す。(7)

今は昔、一条摂政とは、東三条殿の兄におはします。御かたちよりはじめ、心もちひなど、めでたく、ざえ・ありさま、まことしくおはしまし、また色めかしく、女をもおほく御覧じ興ぜさせ給けるに、すこし軽〳〵におぼえさせ給ければ、御名を隠させ給て、大蔵の丞豊蔭となのり、うへならぬ女のがりは、御文もつかはしける。懸想せさせ給、あわせ給もしけるに、皆人、さ心えて、知り参らせたり。

やむごとなく、よき人の姫君のもとへ、おはしましそめにけり。乳母、母などを語らひて、父には知らせさせ給はぬほどに、聞きつけて、いみじく腹立ちて、母をせため、爪弾きをして、いたくのたまひければ、「さることなし」とあらがひて、「まだしきよしの文、書きてたべ」と、母君のわび申たりければ、

人知れず身はいそげども年をへてなど越えがたき逢坂の関

とてつかはしたりければ、父に見すれば、「さては、そらごとなりけり」と思ひて、返し、父のしける、

あづまぢにゆきかふ人にあらぬ身はいつかは越む逢坂の関

豊蔭見て、ほゝえまれけんかしと、御集にあり。おかしく。

引用に際しては、「新日本古典文学大系42」に倣って二段落に分かっておいたが、Ⅱ段との関係で、先に後半（「やむごとなく」以降）から取り上げる。

後半をみると、Ⅱ段とは対照的に、父親の言動に注意が引かれる。というのも、この話では、母親の方は娘に加担し、Ⅱ段には全く顔を出していなかった乳母までもが登場して協力していて、一人父親だけが騙されているからだ。おまけに、「あづまぢに……」の歌は、娘が男と関係を持っていないと知った（騙された）父親が率先して詠んでおり、それを豊蔭が見て頬笑んでさえいる。さらには、語り手までが「おかしく」と感想を述べている。父親の描かれ方がことさら目立つのである。

このような筋立てをみると、男女の愛の獲得とか維持とかがテーマであるというよりも、娘を思う父親の切実な気持ちに同情を誘うと同時に、その父親の間の抜けた姿から揶揄的な笑いを誘うのが、この話の狙いなのではないかとさえ思えてくる。

そのへんのところを、例えば新編日本古典文学全集50『宇治拾遺物語』[8]の頭注は、「母親と乳母とが、十分な計算ずくで、正体の割れている上流貴族の若殿との関係を受け入れようと共謀して、妙に潔癖で好人物の父親を欺いた結婚をめぐる哀笑話。」と評している。また、「新日本古典文学大系42」も脚注で、「一条摂政伊尹の個性的な色好みぶりを伝える話。平中のぶざまさに対し、余裕ある人柄と機智が印象的である。」としながら、すぐ続けて、「娘を彼のものとされてしまったある上流貴族（好古）の好人物らしい風貌もおもしろく、そしてあわれである。」と付け加えている。

さて、Ⅱ段の後段を歌物語、『宇治拾遺物語』の後半を説話と呼ぶならば、歌物語では筋立てが込み入り第三者等が出てこようとも、あくまでも男女の愛情がテーマとして貫かれているのに対し、説話ではそこから完全に離れるのではないが、また別の要素、すなわち、滑稽さやあわれさもテーマとして加わってくると言えよう。

ところで、末尾近くに「と、御集にあり」（波線部）とあるが、これを文字通りに解せば、後半に載る話の出所は『一条摂政御集』であることになる。現存孤本の益田家旧蔵本『一条摂政御集』の本文は先に引いた通りなので、益田家旧蔵本とは違った内容を伝える『一条摂政御集』を見たのかとも思われるが、おそらくそうではあるまい。これまで述べてきた見通しに従うと、益田家旧蔵本と同じ乃至はほぼ同じ形の『一条摂政御集』に載る話が、歌語り・歌物語隆盛の頃（大雑把には十世紀中葉）から説話へと向かっていく文学史の流れの中で、変貌を遂げていって生じた異伝だと見なせばよいであろう。

この問題に関しては、三角洋一氏が『歌語り・歌物語事典』[9]「一条摂政御集」の項で、次のように述べているのは参考になる。

『宇治拾遺物語』五一話にも、『豊蔭』にもとづく挿話が載るが、これについて私見を述べると、この和歌説話は院政期の新しい歌語りの一つではないかと思うのである。院政期には、『古本説話集』上巻のような歌語りの集成がおこなわれるが、中には『土佐日記』にもとづく第四一話、『和泉式部日記』による第六話前半のように、いわば王朝の歌書そのものを要約し抄録して、これを歌人の逸話として後代に伝えようという、和歌説話創出の試みがあったと見られる。これらの説話は語りの場を背景にもっているわけでなく、そもそも歌書による創作執筆であって、書承される性格の説話ではあったが、歌語りの精神だけは継承しているといってよいであろう。

院政期における歌語り・歌物語の「要約」「抄録」を「和

歌説話創出の試み」「創作執筆」と捉えて、歌語り・歌物語から説話への変化の軌跡の具体相を見透かそうとし、そこに「歌語りの精神」が「継承」されていることを強調しているようである。私は、氏の想定する変化の軌跡の具体相は認めた上で、変化の軌跡の中で「歌語りの精神」が「継承」されることよりも、歌語り・歌物語が説話的な性格を帯びていく面を、むしろ注視したいのである。いずれにせよ、今後はこのような変化の具体相を追究することが重要になってくるであろう。

3

問題が大きく拡がっていき過ぎそうになってきたので、焦点を再び『宇治拾遺物語』の叙述に戻し、今度は前半の内容について考えた上で、「とよかげ」の部から『宇治拾遺物語』への流れについて考察してみる。

前半では何より、「大蔵の丞豊蔭となのり」を中心とする部分（傍線部）が目を引くのであるが、その前に、前半全体の眼目は伊尹という人物を紹介するところにあることに、まずは注意しておきたい。「今は昔、一条摂政とは、……」で始まり、伊尹が「東三条殿」（兼家）の兄であることを示してから容貌等の賞賛に移る。そして、そこから切れ目なく、伊尹についてのおそらく一番衆目を引くエピソードとして、傍線部の事蹟を提示しているのである。つまり、前半は歴史上の人物として伊尹を紹介しているのであり、従って、その中にある傍線部も歴史的事実として提示されているのである。

では、この歴史的事実と後半の挿話はどういう関係にあるのであろうか。この歴史的事実の具体例の一つが後半の内容であるとして直接結びつけてよいように一見思えるが、両者を直接結びつけてよいかどうか、慎重な検討が必要であると思う。

まずは、繰り返しになるが、前半傍線部は歴史的事実を伝えていて、後半は「御集」に載る内容を引いているという相違に注意すべきである。また、前半傍線部は伊尹が偽名を使っていたと伝えているのに対し、「御集」には、現行の「とよかげ」の部同様、伊尹が偽名を使っていたなどと書いてあったはずはなく、あくまでも豊蔭なる人物の事蹟として話が書かれていたはずだ。言い換えれば、「御集」に、前半傍線部にある「女をもおほく御覧じ興ぜさせ給けるに、すこし軽〳〵におぼえさせ給ければ、御名を隠させ給て、大蔵の丞豊蔭となのり」とか、あるいは「皆人、さ心えて、知り参らせたり」などの内容が含まれていたはずはなく、また、そんな内容であったはずもないのである。もし、後半の話でも「皆人、さ心えて」いたとすると、父親だけは豊蔭とは実は伊尹であると知らないような展開になってしまい、変である。

このような相違からすると、前半傍線部と後半の内容は直接には結びつかないことになる。そう思って、両者の内容を

再度見比べてみると、看過できない点がもう一つある。前半傍線部の内容からすると、伊尹はあまりに多くの女に懸想しかけていたので軽薄だと思い、「うへならぬ女」を相手にする際には「大蔵の丞豊蔭となのり」ながら懸想したはずである。しかるに、後半の懸想の相手は「やむごとなく、よき人の姫君」であり、相手の女の身分が異なっている。やはり、前半傍線部と後半は直接には結びつかないのだ。

しかし一方、前半傍線部と後半の内容に何らかの関連性があるのも明白だ。それが直接結びつかないとするとどのような関連性があるのであろうか。結論的に言うと、こういうことになるであろう。伊尹が豊蔭なる偽名を使っていた事実があり、その事実を伝えるのが前半傍線部である。そして、その事実を豊蔭その人の事蹟に仕立てて「御集」が創作される。その際、「御集」では伊尹の事蹟を豊蔭の事蹟として置き換えただけではなく、相手の女性の身分とかその他にも虚構が施された（小野好古をモデルとする父親の間抜けな姿も、虚構化の結果である）と考えられる。その「御集」の内容の一部を引いているのが、後半である。

『宇治拾遺物語』の前半傍線部の伝承と後半を総合すると以上のようになると思う。『宇治拾遺物語』には伊尹の事蹟をもとに「御集」が創られたとか、その際に虚構が施されたとかは書いてないわけで、そこまで読み取られることを『宇治拾遺物語』の作者が意図していたかどうかは分からないが、少なくとも結果的には以上のように読み取れることになると思う。

それはともかく、前半傍線部と後半の内容には関連性（豊蔭を軸とした連想性と言うべきか）があるが、厳密には別々の二つの伝承を連続して載せているものとして一応切り離して考えなくてはならないのである、と強調しておきたい。では、おのおのの伝承の源泉はどこにあるのであろうか。後半の伝承についてはさきほど言及したので、ここでは前半傍線部の伝承の出所を検討しておくが、やはりこれも検討するまでもなくと言ってよいと思うが、「とよかげ」の部であろう。つまりは、「とよかげ」の部は、少なくとも二つというか二種類の伝承を生んだのである。一つは、伊尹は実際に「とよかげ」と名告って身分の低い女とは懸想していたという伝承[10]で、これは『宇治拾遺物語』では（必ずしも「御集」によるのではなく）事実を伝えているという体がとられている。もう一つは、『宇治拾遺物語』に「御集」の内容の一部として伝えられるもので、具体的には、姫君と懸想しながらその父を騙したというような伝承である。

さて、「とよかげ」の部を率直に受け止めれば、伊尹が偽名を使って女と懸想を重ねていたのは事実ではなく、伊尹としての実体験を物語世界の中で「とよかげ」の体験に置き換えているように思えるが、それがなぜ『宇治拾遺物語』の前半傍線部の伝承を生んだのであろうか。これについては、拙著[11]では、伊尹が偽名を使って懸想していたという事実が本当にあり、それをもとに「とよかげ」の部が創作され、『宇

治拾遺物語』の前半傍線部の内容にも繋がったという可能性を考えた。つまり、率直な受け止め方とは逆に、さきほど説明した『宇治拾遺物語』から読み取れる経緯が事実であったと想定したのである。これは穿った考え方かもしれず、勿論そう断定できるわけでは到底ない。しかし一方、事実でなかったと実証的に確定する材料もない。どちらとも言えないのであるが、いずれにせよこの問題は、「とよかげ」の部の成立過程の究明にとっては非常に重要な意味を帯びてくるが、本稿は「とよかげ」の部の成立を論じるものではないので、これは置いておくとして、ここでは、本稿におけるこれまでの考察と絡めて、「とよかげ」の部の内容から前半傍線部の伝承が生まれてきた流れに絞って考えを述べておく。

結論的なことから言うと、前半傍線部の伝承についても後半のそれと同じく、説話として「おかしさ」を伝えようとしているところを最も肝腎な点として押さえておかなくてはならないであろう。伊尹が実際に偽名を使っていたとしても、あるいはまた、物語世界の中で架空の人物を仕立て上げたに過ぎなかったとしても、歌語り・歌物語隆盛であった伊尹の時代には、伊尹が如何にして愛情を伝えようとしていたか、あるいは、愛情の物語を表現しようとしたかという意図が肝要であったであろう。ところが、それが説話の世界に入ってくると、もはや愛情の問題よりも、人間として如何に「おかしさ」のある言動をしたかということに興味が移ってくるのである。すると、伊尹が自分の恋を歌物語化するにあたり架空の人物を仕立て上げたという伝えよりも、伊尹は実際に偽名を使って懸想を続けていたという伝えの方がだんぜん興味をそそるのは確実だ。そのような潜在的な意識が、2の末で押さえておいたような文学史の流れの中でいつしか生まれてきて、前半の叙述に繋がったのだろうと思う。ちなみに、『宇治拾遺物語』までくると、その作者にとれば、事実が何であったかは当然興味の中心ではなかったであろう。

二

1

一の内容を簡潔に纏めれば、『宇治拾遺物語』の前半傍線部の伝承も後半の伝承も「とよかげ」の部に発するものであり、愛情の問題から人間の言動の「おかしさ」へと興味の中心が移っていくのに伴って変貌を遂げていった姿だと捉えられる、となる。これを「とよかげ」の部からみれば、「とよかげ」の部は後代の説話に繋がるような内容を孕んでいたというか、説話への芽生えを含み持っていたということができよう。それは考えてみれば当然で、摂政太政大臣まで陞り詰めた人物が、「おほくらのしさうくらはしのとよかげ」（「とよかげ」の部の序文より。漢字をあてれば「大蔵の史生倉橋の豊蔭」となろう）と名告りながら懸想を続けていたともとれるわけだから、先にも少し触れたように、当時としてはあくまでも男女の愛情の問題だとしても、説話が見逃すはずはあるまい。

すると、後世の説話に繋がっていく要素が歌語り・歌物語隆盛の頃にすでに芽生えていたということになり、次に、そのような視点に立って、今度は『一条摂政御集』の他撰部分（42番歌以下）から例として一首取り上げて考えを述べておく。

その前に、『島津忠夫著作集第十巻』第一章の内容に戻っておくと、島津氏は、『万葉集』[12]巻九掲載の高橋虫麻呂の長歌「見二菟原処女墓一歌一首」とその反歌などが伝える「葦屋之菟名負処女」をめぐる妻争いの伝説と、『大和物語』第百四十七段の生田川の妻争いの伝説を比較し、特に、二人の男が死後の世界で血みどろの争いをなす『大和物語』の末尾に載る後日譚について、

もはや、この後日譚は、純粋な心の恋物語から、俗な心の争いになっていて、やがて、『今昔物語集』などの説話の世界に繋がってゆくものを感じさせる。

と評している。島津氏の論点とはややずれるかも知れないのだが、主としてこの考察に刺激を受け、歌語り・歌物語隆盛の時代にすでに芽生えていたであろう説話的なものをめぐって考えた次第である。

2

伊尹が北の方恵子女王と結婚を果たしたにも拘わらず「やないし」（＝野内侍、小野好古女）の所に入り浸りになっていた時に恵子から贈られた歌が、『一条摂政御集』の他撰部分に載る。

あひたまてのちに、やないしのもとこもりおはして、「うちに〳〵」とあるに、きたのかた

もゝしきはをのゝえくたす山なれやいりにし人のおとづれもせぬ（66番）

これと同じ歌が、伊尹が撰和歌所別当を務めた『後撰和歌集』（以下、『後撰集』と略称する）の巻十一・恋三にも載るのであるが、『後撰集』では誰とも知れない「をんな」の歌となっており、詠歌事情もかなり違ったものになっている。[13]

内にまゐりてひさしうおとせざりけるをとこに　をんな

ももしきはをのゝえくたす山なれや入りにし人のおとづれもせぬ（717番）

拙著[14]でも、また、本誌前巻に掲載した前稿[15]でも拘ったが、ここでもこの同歌の異伝の前後関係に拘ってみたい。

結論から言うと、私は『後撰集』に載る形の「をんな」詠から恵子詠へと変化したものと考えているのだが、その根拠の概略は次のようなものである。

『一条摂政御集』の他撰部分には計十首の恵子関連の歌が[16]載るが、それらはすべて二人の仲が順調ではなかった頃のものばかりである。そのことから、二人の仲が順調ではなかった頃をテーマに絞った歌語り・歌物語が創られていたと想定できる。すると、66番歌も「をんな」詠を利用してその歌語り・歌物語の中に組み込まれたものと考えられるのである。あるいは、その背景には、恵子が他人詠を利用して伊尹に送りつけたという事実が実際にあったのかも知れない。

私はこのように想定するわけだが、それを今回は、島津氏の驥尾に付した考察と絡めて捉え直しておく。

取り敢えず両者の詠歌事情を比較しておかなくてはならない。「をんな」詠では、実際に宮中に行ったまま長らく音沙汰のない男に「をんな」が詠んだ歌となっているのに対し、恵子詠ではそれよりかなり事情が込み入っており、恵子と結婚後伊尹は好古女の所に入り浸りでいながら宮中にいると嘘を吐き、恵子はその嘘をお見通しの上で好古女の所にいる伊尹に歌を贈っていることになろう。『述異記』に載る晋の王質の故事を引いた歌も、恵子詠からの方がより強い皮肉が感じられるのである。[17]

では、詠歌事情の比較的単純な「をんな」詠から、より込み入った恵子詠へと変化を遂げたのか、あるいはその逆であるのか。さきほど、「とよかげ」の部と『宇治拾遺物語』との関連性を検討しながら、歌語り・歌物語隆盛の時代から説話の時代への史的流れを見据えれば、歌語り・歌物語隆盛の頃にすでに説話への変化の萌芽が芽生えていたと認められると確認した。それに従えば、「をんな」詠から恵子詠へと変貌したと見なす方が、やはり蓋然性が高いのではないかと考える。

というのは、「をんな」詠から恵子詠への変化だとすると、歌語り・歌物語から説話へと半歩進んでいるとも言えると思うからである。両者ともに男女の恋情と『述異記』を引いた女の歌のできばえに焦点が絞られているのは同じで、事情が込み入ってきている恵子詠の場合であっても、その点は動かないであろう。しかし、恵子詠には、男女間の丁々発止の遣り取りの一端が盛り込まれているのもまた事実である。もしこれがもう少し形を変え、（より細部まで描くようになり）妻を騙そうとする夫とそれに対抗する妻の知恵比べのようなものの面白みが前面に出るような形にまで変貌を遂げ、かつ、歌もその面白みを増すのに力を貸しているような形になれば、説話へと一歩あるいはそれ以上踏み出すことになる。例えば、妻を騙しているつもりでいながら痛いしっぺ返しをくらう男の滑稽な姿などがテーマになったとすればである。恵子詠でも説話へと半歩進み、説話への萌芽を孕んでいるとも見なせると思うのである（実際に、説話へと変貌を遂げたかどうかは別として）。

同様の例は、探せばいくらも見つかるであろう。例えば、『後撰集』巻十・恋二に載る、次の贈答歌などはどうであろうか。

をとこのほどひさしうありてまできて、み心のいとつらさに十二年の山ごもりしてなむひさしうきこえざりつるといひいれたりければ、よびいれて物などいひて返しつかはしけるが、又おともせざりければいでしより見えずなりにし月影は又山のはに入りやしにけん（693番）

返し

あしひきの山におふてふもろかづらもろともにこそいらまほしけれ（694番）

『後撰集』らしい贈答歌であるが、これも、話がもっと入り組んできて、二人の愛情や歌の遣り取りよりも、男の冗談めかした大袈裟な言い訳や、それに対する女の反応がもっとおかしく描かれてくれば、説話へと変貌を遂げていくであろう。『後撰集』にはこのようなものが多く載せられているわけで、勿論『後撰集』以外にも同じようなものは多くあるだろう。『平中物語』に載るものを始め、数ある平中説話と呼ばれるものなどはその典型であろう。説話への萌芽がこの時代すでに芽生えてきているとも言えると思うのである。このような中、『後撰集』693694番の贈答歌の詠歌事情が、より単純なものへ変化していくことは想定し難いように思う。同様に、恵子詠から「をんな」詠への変化だと考えるのも無理があるのではないか。

以上の検討からして、やはり、「をんな」詠から恵子詠への変化とみたいのである。

3

最後に前稿との関わりで一言付け加えておきたい。

恵子詠をみながら、説話へ半歩進んでいるとか、説話への萌芽がみられるとか強調してきたが、あくまでもそれは半歩であり萌芽であることをもう一度繰り返しておきたい。換言すると、恵子詠であっても歌語り・歌物語の段階にとどまっており（島津氏の峻別に従えば、「歌語り」であろう）、やはり男女の愛情（具体的に言うと、結婚後にも拘わらず夫伊尹から十分に愛されない恵子の様子）がテーマとなっており、だからこそ道綱母の共感をよんだのであり、その道綱母の共感について具体的詳細に検討したのが前稿であった。

おわりに

以上、島津先生の御論に刺激されて、考えたことを縷々述べてきた。本論中でも同様のことを何度か繰り返したが、私の考察内容は、先生の論を真っ直ぐに敷衍していったものとも、また、平行して考えていったものともなっていない。あくまでも、島津先生の御論を読んで、私なりに考えたことを述べたものである。島津論を曲解しているとの謗りも覚悟の

上で。また、本稿は覚書として綴ったもので、「はじめに」でも触れた通り、近い将来、文学史を見据えたもっと纏まりのある論考へと繋げていく心づもりでいるが、その際には、歌語り・歌物語と説話だけではなく、日記文学、特に『蜻蛉日記』も視野に入れていくことになるであろう。

【注】

（1）第一章の「付記」には「もとは、説話の講座6『説話とその周縁―物語・芸能―』（平成五年、勉誠社刊）に「歌物語」という題で依頼されて執筆したものを、『和歌文学史の研究　和歌編』に、題名を変えて収めた。（後略）」と記されている。『和歌文学史の研究　和歌編』は、一九九七年六月・角川書店。

（2）鑑賞日本古典文学第5巻『伊勢物語・大和物語』（一九七五年一一月・角川書店）。

（3）今井源衛氏も『大和物語評釈下巻』（二〇〇〇年二月・笠間書院）で、『今昔物語集』の『大和物語』との相違点として、「女の性格が『大和物語』とはかなり違って、冷淡である。発端の、二人が別れるまでの描写にも、『大和物語』が漸層法を用いて二人の強い愛情を印象づけようとするのに対して、『今昔物語集』では至極あっさりしているし、別れてから後、夫を恋い慕うことは全く省かれて」いる点などを挙げて、結局『今昔物語集』は「『大和物語』のやさしい抒情性が失われて、単なる珍しい世間話に堕した感がある」と評する。

（4）『一条摂政御集』の引用は、孤本益田家旧蔵伝西行筆本により、私に句読点・濁点等を付した。以下、同じ。ただし、益田家旧蔵本につき、私が実際に見たのは、一九三七年松かけ会発行の複製本の一九五八年再版本である。その際、益田家旧蔵本はかなり読みづらい字体であるので、『私家集大成』・『新編国歌大観』・『一条摂政御集注釈』（平安文学輪読会著、一九六七年一一月・塙書房）等の翻刻を参考にした。なお、益田家旧蔵本では、「たまふ」のウ音便形は、「う」を表記しない形（「たまて」など）になっている。

（5）二〇〇七年一〇月・和泉書院。当該箇所は、「第一部　第三章　「とよかげ」の部研究　第一節　「とよかげ」の部の特質　4　「とよかげ」の部のA部とB部の異質性（二）」。以下、「拙著」という時は、この著書を指す。

（6）ここに「面白み」という言葉を数度使っているが、ここでは「愛を獲得・維持」する歌物語の「面白み」、また、その歌物語を言わば彩る「面白み」という意味で用いているのであり、本稿で何度も言及している説話にみられる人間の言動の「おかしさ」などとは別の意味である。念のために断っておく。

（7）『宇治拾遺物語』の引用は、新日本古典文学大系42『宇治拾遺物語古本説話集』（『宇治拾遺物語』は三木紀人・浅見和彦氏校注、一九九〇年一一月・岩波書店）によ

る。傍線等は私に付した。

（8）小林保治・増古和子氏校注・訳、一九九六年七月・小学館。

（9）雨海博洋・神作光一・中田武司氏編、一九九七年二月・勉誠社。

（10）「とよかげ」の部の1番歌詞書部分に、「いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど」とある。これは「とよかげ」の部に出る八人の懸想相手全員について言っているのか、最初の女（12番歌の贈答相手）についてだけ言っているのか問題の箇所だが、「とよかげにことならぬ」が身分に関する言及なら、『宇治拾遺物語』の「うへならぬ女のがりは……」と通じるものがある。ならば、『宇治拾遺物語』のこのあたりの記述が、「とよかげ」の部を出所とする傍証ともなろう。

（11）当該箇所は、「第一部第三章　「とよかげ」の部研究　第三節　歌語りから「とよかげ」の部へ―他撰部の小野好古女関連歌を中心として―　3　Ⅱ段成立における小野好古家の役割」。

（12）『万葉集』の引用は、『新編国歌大観』による。高橋虫麻呂の長歌は1813番（旧1809番）歌で、1814 1815番（旧1810 1811番）歌がその反歌となっている。

（13）『後撰集』の引用は、『新編国歌大観』による。以下、同じ。

（14）当該箇所は、「第一部第一章　他撰部の歌語り的歌群研究　第二節　北の方恵子女王　2　65・66番」。

（15）「兼家の嘘の言い訳を求める道綱母の歌語り享受―道綱母対町の小路の女と恵子女王対好古女―」（『言語文化研究徳島大学総合科学部』第14巻・二〇〇六年一二月）。以下、「前稿」という時は、この論文を指す。

（16）65 66 101 102 103 106 170 184 185 186番の十首だが、184 185 186番の三首は恵子との贈答ではなくて、「このおとゞ、きたのかたとゐじたまて、よかはにて、ほうしにならむとしたまふに……」という状況下で交わされた「ゐどの」との贈答歌である。

（17）『一条摂政御集』66番は恵子の単独詠で、伊尹の返歌等は載っていない。従って、形の上からは恵子の独詠歌とも見なせそうで、そうとっても詞書の内容とも矛盾しない。が、伊尹の私家集に恵子の独詠歌が単独で載るのは不自然なので、伊尹に贈られた歌とみた。一方、『後撰集』717番が、「をんな」の独詠歌である可能性は十分にあるだろう。その場合は、この歌から男に対する皮肉を読み取るのは無理で、孤独な寂しさを王質の故事に託して詠んだ歌になるであろう。「をんな」詠と恵子詠の距離はかなり拡がるとも言える。